

新著紹介

○構造地質學講話 (デーリ著 本間不二男譯)

菊版三四四頁、東京市外西大久保 古今書院發行 昭和二年十一月 定價貳圓九拾錢

本書はハバアド大學教授にして岩石地質學の大家であるデーリーの「我等の動き易い地球」を譯述したものである。譯書名の構造地質學講話といふのは當らないので之は構造地質學を説いたのではなく最近の動的地質學を講述したものである。原著者は大家であつて自己の信ずる所を堂々と説述し其の思想の穩健にして然かも其の間に新説を提唱して居るのば誠に敬服に堪へない所である。總て八章より成り、先づ大正十二年の大震災に筆を起して地震の性質を論究し、地球の内部、火山力、水準面の變化を説いて遂に山脈の成因に及び地質學の最も興味深き方面を偉大な學殖で征服し盡して居る本間君の譯筆は誠に流暢にして少しの淀みもなく、恐く地質學書にしてかくも讀み易いものは我國では空前といつてよい所によると譯者はこの大冊を二週日にして譯了したといふことで、其の健筆にして且つ讀解力の異常なることは驚くべきものがある。本譯書の瑕瑾だと思ふものを少しく擧げて再刻の際に訂正を希望すると共に本書の讀者に御注意して置きたい。本書中に於ける固有名詞は其の讀み方が違つて居る

ものが甚しく多い。尤も其内には周知の地名人名も少なくないから、さして障りにもならないが原語がない爲め或は人を誤まらせるものなきにあらずと憂うのである。猶一つは數量をあげた數字がかなり原著と違つてゐる點でこれは原著を訂正されたのではなさうである。又挿繪が原著書に比敵する位多く挿入してゐることは理解を助けること著しいたゞ吝むらくは原著者から原書になつた寫眞を得て版にしたならばもつと明瞭な原著書の様な美しい圖版を日本人達にも與へ得たものなといふ點である。辭書を引くこと、もう一度原著と照り合すことによつて若干の誤りが正され且つ原著にある様な索引が附けられたなら日本の地學愛好者と日本の地質學に執つて本書ほどの位役立つものか知れない。本書を獲て評者は地學に關する良著の邦譯が日本人の手に成つた書物よりも參考になる點の多い時代をまだ脱してゐないことを感じた地學書の譯書が續出することが望ましい。(N)

○高木利太著 家藏日本地誌目錄 (非賣品)

もと大阪毎日新聞社の幹部であつた著者は、餘暇に年來日本の地誌を蒐集するといふ道樂をもつてゐられ、近頃の震災を見てからこの蒐集を防護する必要を感じ、邸宅内に一文庫を建て、これに我國で出來たありとある地誌を蒐集せんと企て現に收蔵された凡二千部の國誌、府縣誌、郡誌、村記、事略紀行、調査書の類を本書によつて逐一解題されたものである。總國及五畿七道各國に部類がわけてあつて、一見して我國既

刊の地誌目と其内容がわかる。こうした目録をみて、著者の苦心を感じ、併せて同好の志がその地方の小誌たりとも寄せられんことを望みたい。那誌の類でまだまだ足らぬものが多いが、著者はその後既に蒐集が出来たので續篇を出すといつてゐられる。予はこうした蒐集癖を學界のために喜ぶ一人である。(藤田)

○地理學雜誌 (奈良地理學會發行)

西田與四郎教授を會長とし、香川幹一教諭の熱心に幹旋されて居る奈良地理學會は昭和二年十二月地理學雜誌の第一號を發行した。創刊の辭にある様に本誌は我國の地理學界で手を附けて居ない方面に關する奈良地理學會會員の研究を公表し、江湖の批判に待たんが爲に刊行されるものである。

第一號の内容を舉げるとマルトンヌの地文學の第一編第一章を帷子學士の譯された「地理學の發達と其の定義」、グイダル・ド・ブラーシュの人文地理學原論所載の「都市」を紹介された西田教授の記事、富田學士の「地質時代の年數に就いて」、マルトンヌの「内陸盆地流域地方について」の三村信男氏の紹介、次は香川氏「龜岡盆地」、山崎宏氏「城郭の選地に關する考察」、山村嘉治氏「磯城郡多村の地名考」の三研究が載せられている。猶紹介欄には一昨年から以後に出た外國の地理書類の紹介等があり、雜錄、教授資料、受験欄、質疑應答、會報の諸欄で賑はひ、雜誌の四分ノ一以上は後進誘掖に費されてゐるのは有難いことである。之を他の地理學雜誌と比較する

のは甚だ僭越ではあるが、其の體裁は地理學評論に似、編輯は「地球」に近く、記事の或るものは小田内氏の人文地理に類したものと云へる。かういふ風であるからこの雜誌が研究發表機關だといはれるのに驚かずに我が地球讀者や地理學評論讀者が併讀されるのを我國地理學の爲に希望する。奈良地理學會へ入會せんとされる方は奈良縣師範學校地理教室香川幹一氏に申込まればよいさうである。猶地理學雜誌は年一回以上發行され實費(約五十錢)で頒布されるといふ。第一號は金五十錢で、頁數は百十頁、龜岡盆地東側斷層崖の圖版がある。(愛書生)

雜 報

○丹波國綾部及福知山四近の段丘

丹波由良川流

域には美しき數階の段丘發達す。京大地理學科生の調査した處によると綾部町本宮山(九十一米、元大本教社殿所在地)の頂上には礫層があり、一部分古生層角岩の山骨を露出する、この礫層は和知川(由良川の上流の河床の高かりし頃運搬せしものなるべく、全部古生層岩石の礫よりなる。綾部女學校小學校其他諸役所の存在する上町は約六十米の段丘にあり、舊藩時代の士族屋敷も多くはこの段丘上にありし由にて古風の家屋保存さる。以下二三段の段丘ありて冲積低地に下る。低地は三十九米許の高距を有し、綾部町の大部は更に一米餘